

厚生労働科学研究費補助金(こころの健康科学研究事業)  
総合研究報告書

高次脳機能障害者の地域生活支援の推進に関する研究、失語症者の社会参加

分担研究者 種村 純 川崎医療福祉大学 教授

研究要旨 高次脳機能障害者受け入れ施設において失語症者は「社会的資源の利用相談」、「当事者家族、周囲の人への指導」、「自立生活のための訓練支援」の順に行われていた。

岡山県内の介護保険施設において失語症者を含む高次脳機能障害者は身体機能の訓練、創作活動・レクリエーション、自立生活のための訓練・支援、当事者家族・周囲の人々への指導が行われていた。コミュニケーション機能の訓練も過半数の施設で行われていた。

就労継続支援 B 型施設では失語症者は概して良好な適応を示し、日常生活活動が自立し、日常生活関連活動には困難を示す者が多く含まれていた。金銭の管理、作業手順、時計の読み、読み書き障害などが職業生活上大きな障害要因になっていた。そのため事務職等への就労は難しかった。職務活動については、手作業等は慣れれば十分可能であり、持続力も認められた。サービス業などのコミュニケーション技能を必要とする業務、読み書き計算を要する事務的業務は困難であり、作業的業務が適していると考えられた。

岡山県内の就労継続支援 A 型施設に対する郵送調査の結果、同施設を利用している失語症者はきわめて少数であった。就労継続支援 A 型施設を利用している失語症者では日常生活関連活動がほぼ自立していたが、聴覚的言語理解を含む高度なコミュニケーション能力および精緻な作業能力が職業生活上大きな障害要因になっていた。本報告の就労支援施設において失語症者を対象に、実務教育と職場体験を中心とした組織的プログラムを進めている、特定の生産・販売業務を行っており、失語症者が可能な業務を行っている、失語症者にコミュニケーションを含む多様な活動から就労支援につなげている、などの支援が行われていた。失語症者の就労支援にあたって言語障害を受容し、就労に進めていくこと、言語障害による職務上の困難を補う工夫が必要であった。

研究協力者 後藤祐之 社会福祉法人旭川荘 高次脳機能障害者支援室長  
平岡崇 川崎医療福祉大学リハビリテーション学科教授  
椿原彰夫 川崎医療福祉大学学長

#### A. 研究目的

失語症者に対する社会支援においては日常生活活動および社会活動の自立、さらに就労を目指すための支援が展開される。従来の調査において失語症者では基本的な日常生活活動は自立している者が多いが、公共交通機関の利用や金銭管理のような応用的な日常生活活動には支援が必要であることが多いことが明らかにされている。社会的支援制度の面から見ると、失語症者は介護保険を利用する機会が多いが、一方で就労支援を希望することも多い。失語症は、そのコミュニケーション障害のために就労に多大な困難を示す障害である。

失語症者を対象とした医療機関における職業復帰成績は 10～30%である。一方で就労支援機関における失語症者の就労率成績を見ると 70～80%と、はるかに高い結果を示す。これは就労の意欲があり、就労の可能性がある者のみがサービスを受けていることで、このような成績差が生じていると考えられる。

本研究においては失語症者に対する社会支援の実態と問題点を明らかにする目的で、高次脳機能障害者受け入れ施設、介護保険施設及び就労支援施設における失語症者の利用状況、支援内容について調査した。障害者の社会支援においては社会に適応する上で必要な能力水準を目指す、という社会中心の観点と、障害の内容に応じて必要な支援を提供する、という個人中心の視点の両者が必要になる。高次脳機能障害者利用施設及び介護保険施設は主に後者の個人中心の立場から支援が提供され、就労支援施設では前者の社会中心の立場

からの支援が必要になると考えられる。これらの調査を通じて、失語症者が自立、就労を目指す上で特有な問題点とその支援方法について検討した。

#### B. 高次脳機能障害者受け入れ施設における失語症利用者の利用上の実際問題点とその対応方法に関する調査

対象：全国の高次脳機能障害支援施設 1,748 施設に対して郵送で調査票を送付した。返信は 419 件、24.1%であった。

調査項目：施設の組織、失語症の受け入れ、高次脳機能障害の利用者数、失語症者へのサービス内容および失語症者への社会的支援に関する全 27 項目であった。

結果：施設の所属では社会福祉法人が最も多く、次いで医療法人であった。施設の性格では障害者福祉施設、就労支援施設、一般病院の順となった。失語症者の受け入れについて、「失語症のみも対象となる」との回答が 194 (55.6%)と多く、一方で「失語症のみは対象にならない」との回答は 53(15.2%)であった。施設全体の利用者総数は 212,575 名で、男性の方がやや多かった。失語症者の利用者数は 1,875 名で、施設利用者総数の 2.7%で、男性の方が女性よりも多かった。失語症者の年齢分布をみると、60 歳代を中心に 20 歳未満から 80 歳以上まで、広く分布していた。失語症の種類では運動性失語が 472 名(43.5%)と最も多く、その他感覚性失語、健忘失語、全失語の順となった。失語症者の発症からの経過期間では 1 年未満が最も多く、その後は経過に従って減少していた。失語症者に対するサービスの実施状況を見ると、「社会的資源の利用相談」、「当事者家族、周囲の人への指導」、「自立生活のための訓練支援」の順に、多くの施設で行われており、一方、「生活場所の提供」や「職業能力の評価」を行っている施設は少なかった。高次脳機能障害者受け入れ施設のうち就労支援施設ではサービス施行後の就労可能性が受け入れ基準となるため、記憶、注意等の高次脳機能障害者にくらべて就労に特に困難を示す失語症者の受け入れが低くなったと考えられた。

#### C. 岡山県内の介護保険施設における高次脳機能障害者利用状況に関する実態調査

対象：岡山県内の介護保険施設 2,514 施設で、居宅介護支援、介護予防支援、訪問介護、訪問看護、訪問リハビリテーション、通所介護、通所リハビリテーション、短期入所生活介護、短期入所療養介護、特定施設入居者生活介護、小規模多機能型居宅介護、介護老人福祉施設、介護老人保健施設、介護療養型医療施設の各種サービスを行っている事業所であった。

調査項目：施設の所属、サービス内容、各種高次脳機能障害者（失語症、失認症・失行症、記憶障

害、注意・遂行機能障害、行動や情緒の障害、認知症）の対象者数（入所・通所・在宅別、男女別）、高次脳機能障害の原因疾患、高次脳機能障害者に対する各種サービスの実施状況、必要性、困難度、高次脳機能障害者に対応する職種に関する、全 106 項目であった。

結果：返信は 441 件であった。施設の所属は営利法人 180(41%)が最も多く、次いで社会福祉法人 110(25%)、医療法人 80(18%)であった。サービス内容としては居宅介護支援と通所介護を行っている事業所が 142(32.3%)と多く、その他は訪問看護等であった。これらの介護保険施設が対象としている失語症者は入所 300 名、通所 290 名、在宅 460 名、合わせて 1,068 名であった。同様に失認症・失行症者は 926 名、記憶障害者は 2,013 名、そのうち認知症に伴う記憶障害者は 1,625 名、注意・遂行機能障害者は 1,715 名、行動や情緒の障害を有する者は 1,950 名、認知症者は 4,712 名であった。失語症を含む高次脳機能障害の原因疾患では脳梗塞、脳出血など脳血管障害が多く、次いで変性疾患であった。高次脳機能障害者に対するサービスでは身体機能の訓練、創作活動・レクリエーション、自立生活のための訓練・支援、当事者家族・周囲の人々への指導が多く行われていた。コミュニケーション機能の訓練も過半数の施設で行われていた。

多くの高次脳機能障害者が介護保険施設を利用していることが明らかになった。高次脳機能障害の種類では医療機関の実態調査結果と比べて失語症が少なく、記憶障害および行動と情緒の障害が多かった。高次脳機能障害者に対して身体機能訓練、レクリエーション活動、自立訓練、家族支援などが行われていた。

#### D. 就労支援 B 型施設における失語症者の就労支援の問題点と対応の実際を検討した。

対象：岡山県内の就労継続支援 B 型施設のうち失語症者が在籍している 3 施設を対象として、失語症者の就労支援担当者に面接調査を行った。それらの施設に在席した失語症者は計 11 名であった。調査内容：施設の組織、規模、職員構成、失語症利用者の障害内容、発症からの経緯、サービスの利用期間、内容、支援方法、担当者の職種、社会的支援制度の利用、就労の要因、就労支援から見た就労の必要条件（コミュニケーション能力、その他）転帰であった。

結果：いずれの施設も社会福祉法人であった。失語症者は通所でこれらの施設を利用しており、女性が 3 名、男性が 8 名、年齢は 40 歳代から 60 歳代までであった。原因疾患は脳血管障害 7 名、外傷性脳損傷 2 名、脳腫瘍 2 名であった。失語型は Broca 失語 4 名、健忘失語 6 名などで、重症度は中等度 3 名、軽度 8 名、片麻痺は 6 名であった。発

症からの経過期間は1年から13年の範囲であった。

就労継続支援 B 型施設では失語症者は概して良好な適応を示した。本研究の対象である失語症者では日常生活活動が自立していたが、日常生活関連活動には困難を示す者が多く含まれていた。種々の困難のうち、金銭の管理、作業手順、時計の読みなどゲルストマン症候群に関連した障害が職業生活上大きな障害要因になっていた。読み書き障害のために書類を扱うことはほとんどできなかった。会話ではことばのみによる説明では十分理解されず、複数の者を対象とした指示が理解されにくかった。これに対して文字、数字を呈示し、また言語表現を工夫していた。

職務活動については、手作業等は慣れれば十分可能であり、持続力も認められた。サービス業などのコミュニケーション技能を必要とする業務、読み書き計算を要する事務的業務は困難であり、作業的業務が適していると考えられた。就労継続支援 B 型施設では作業的内容の業務が主であり、失語症者にとって適した環境であると考えられた。

#### D. 就労支援 A 型における失語症者の利用状況質問紙調査

方法：岡山県内における就労継続支援 A 型 68 施設を対象に質問紙調査を行った。質問項目は失語症利用者の有無、失語症者が利用しているサービスの内容および失語症者を担当する職種であった。結果：68 施設中 39 施設から回答が得られ、回収率は 57% であった。回答があった 39 施設のうち 2 施設に失語症者が在籍していた。失語症者が利用していたサービスはいずれも就労支援 A 型であった。両施設における失語症利用者の担当者は生活指導員、サービス管理者、その他であった。

結論：回答が得られた施設中で失語症者が在籍していた施設は 2 施設で、その比率は 5% で少なかった。

#### E. 失語症が利用している就労継続支援 A 型及び就労移行支援施設の訪問調査

対象施設：就労継続支援 A 型及び就労移行支援施設のうち、失語症者が在籍している 4 施設を対象として、失語症者の活動状況について、失語症者の就労支援担当者に面接調査を行った。

調査内容：施設の組織、規模、職員構成、失語症利用者の障害内容、発症からの経緯、サービスの利用期間、内容、支援方法、担当者の職種、社会的支援制度の利用、就労の要因、就労支援から見た就労の必要条件（コミュニケーション能力、その他）転帰であった。

結果：施設の組織形態には株式会社、社会福祉法人、社団法人、NPO 法人と多彩であり、職員構成も施設ごとに大きく相違し、作業療法士、社会福祉士、介護福祉士、生活支援員、職業指導員の他、

発達障害分野の教員、経営・コンサルティングの専門家も関与していた。

失語症利用者は 4 施設合わせて 20 名で、原因疾患はほとんどが脳血管障害で、外傷性脳損傷も含まれていた。年齢は 30 歳代から 50 歳代が中心、発症からの経過期間は 3 年から 10 年までであった。日常生活活動は自立しており、日常生活関連活動では買い物、食事の用意、預貯金の出し入れ、会話については支援が必要である。特にコミュニケーションに関しては、話だけでは伝わらず、文字、数字、絵、写真を示すことが多い。1 対 1 では会話を理解できるが、集団では伝わらない。

作業内容の制限として、作業内容の聴覚的理解の障害により、手順書を必要とした。また、営業、事務の業務も困難であったが、身体的作業は可能で、農作業が行われていた。就労支援施設の活動内容として以下の 3 種があった。実務教育と職場体験を中心とした組織的プログラムを進めている。特定の生産・販売業務を行っており、失語症者が可能な業務を行っている。失語症者にコミュニケーションを含む多様な活動から就労支援につなげている。失語症者の就労支援にあたって言語障害を受容し、就労に進めていくこと、言語障害による職務上の困難を補う工夫が必要であった。

#### 健康危険情報

##### 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
  2. 実用新案登録 なし
  3. その他 なし
- 特になし

##### 研究発表

1. 論文発表
  - ・宮崎 泰広、種村 純：漢字音読課題にて錯読後の次課題で前課題の正答を表出した混合型超皮質性失語例、高次脳機能研究、32 巻 2 号、pp286-293、2012.
  - ・種村 純：急性期病棟での失語症患者への対応、失語症の基礎知識、Brain Nursing、28 巻 9 号、pp922-925、2012.
  - ・種村 純、小嶋 知幸、佐野 洋子、立石 雅子、三村 将、日本高次脳機能障害学会社会保険委員会失語症アウトカム検討小委員会：失語症言語治療に関する後方視的研究、標準失語症検査得点の改善とその要因、高次脳機能研究、32 巻 3 号、pp497-513、2012.
  - ・宮崎泰広、種村純、伊藤絵里子：失語症者における新造語の出現機序について、高次脳機能研究、33 巻 1 号、pp20-27、2013
  - ・種村純、椿原彰夫、植谷利英、中島八十一：障

害者福祉分野における失語症の社会的支援に関する実態調査、高次脳機能研究、33 巻 1 号、pp37-44、2013

・種村純，椿原彰夫：同時失認．Clinical Neuroscience32(2)，157-160，2014

・太田信子，種村純：The Cambridge Prospective Memory Test 日本版の標準化と信頼性に関する研究．高次脳機能研究 33(3)，339-346，2013

・太田信子，種村純：The Cambridge Prospective Memory Test 時間ベース課題の記憶ストラテジーに関する神経心理学的検討．神経心理学 29(2)，133-142，2013

・宮崎泰広，藤代裕子，今井真紀，種村純：数唱や無意味音列の復唱は可能であるが複数単語の復唱に困難を示した失語症例～言語性短期記憶についての一考察～．高次脳機能研究 34(1)，17-25，2014

・山本 弘子，八島 三男，園田 尚美，綿森 淑子，種村 純，中村 やす：失語症の人と家族の生活の実像 全国失語症友の会連合会「失語症の方の生活のしづらさに関する調査 2013 報告書」より見えてくるもの、地域リハビリテーション9 巻 4 号 264-271(2014.04)

## 2. 学会発表

・狩長 弘親，八木 真美，種村 純：頭部外傷患者の公共交通機関利用の獲得に向けて、第 46 回日本作業療法学会抄録集、p449、2012.

・太田 信子，種村 純：記憶ストラテジー適用の年齢による質的変遷の検討、The Cambridge Prospective Memory Test 時間ベース課題を用いて、第 36 回日本神経心理学会総会プログラム・予稿集、p165、2012.

・太田 信子，種村 純，石井 雅之：展望的記憶における記憶ストラテジー記載に関する検討、予定の想起に必要な情報を取り出す神経心理学的過程の検討、総合リハビリテーション、41 巻 1 号、p87、2013.

・太田 信子，種村 純：記憶ストラテジー適用の年齢による質的変遷の検討、The Cambridge Prospective Memory Test 時間ベース課題を用いて、神経心理学、28 巻 4 号、p304、2012.

・宮崎泰広、矢野有基子、種村純：非語の復唱は可能であるが複数単語の復唱に困難を示した失語症例、高次脳機能研究、33 巻 1 号、pp52-53、2013.

・太田信子、種村純：the Cambridge Prospective Memory Test 日本版における妥当性の検討、課題形式と想起形式別による分析、高次脳機能研究、33 巻 1 号、pp63、2013.

・逸見佳代、宮崎彰子、矢野有基子、中上美帆、椿原彰夫、種村純：CAT の臨床的データの検討、CAT 下位検査項目間の関連について、高次脳機能研究、33 巻 1 号、pp63-64、2013.

・矢野有基子、宮崎彰子、宮崎泰広、逸見佳代、中上美帆、椿原彰夫、種村純：標準注意検査法と他の神経心理学的検査との関連性の検討、高次脳機能研究、33 巻 1 号、pp64、2013.

・用稲丈人、八木真美、種村純、平岡崇、椿原彰夫：BADs 遂行機能検査の因子構造と Raven's Progressive Matrices 尺度との関係、高次脳機能研究、33 巻 1 号、pp64、2013.

・八木真美、用稲丈人、宮崎彰子、後藤祐之、種村純、椿原彰夫：逆行性健忘症が問題解決能力に影響を及ぼした一症例、高次脳機能研究、33 巻 1 号、pp81、2013.

・時田春樹、種村純：脳卒中急性期における注意障害の改善について、高次脳機能研究、33 巻 1 号、pp117、2013.

・狩長弘親、用稲丈人、種村純：高次脳機能障害者の金銭管理能力に関する因子の検討、神経心理学的指標を用いて、高次脳機能研究、33 巻 1 号、pp123、2013.

・釘本真実、清水大輔、酒井浩、種村純：左手に注意を集中することでエイリアンハンドが抑止可能となり ADL の改善につながった一症例、高次脳機能研究、33 巻 1 号、pp142、2013.

・種村純：シンポジウム「ニューロリハビリテーションと医療連携」高次脳機能障害の支援システム、院内・地域の支援体制、Neurorehabilitation in Okayama 2013 プログラム・予稿集、p135、2013

・種村純，八島三男，園田尚美，山本弘子，宮崎泰広：失語症者の生活のしづらさに関するアンケート調査 2012、調査結果の解析的検討．第 14 回日本言語聴覚学会 札幌，2013.6.28

・宮崎泰広，池野雅裕，関泰子，山本千明，熊倉勇美：脳の器質的疾患により生ずる音の繰り返し音響学的分析．第14回言語聴覚学会，札幌，2013.6

・宮崎泰広，種村純，新井伸征，椿原彰夫：アナルトリーを呈した失語症例における音読時の音韻的な手掛かりについて．第37回高次脳機能障害学会，松江，2013.11

・太田 信子，種村 純：The Cambridge Prospective Memory Test 下位尺度化の検討、神経心理学、30 巻 4 号 310(2014.12)

・宮崎 彰子，川崎 美香，八木 真美，後藤 圭乃，種村 純：小児失語は改善したが、注意障害が残存した左利き左頭頂葉病変の一症例、言語聴覚研究 11 巻 3 号、243(2014.09)

・八木 真美，用稲 丈人，宮崎 彰子，後藤 祐之，種村 純，平岡 崇，椿原 彰夫：社会生活を阻害する行動障害を呈した一症例の支援経過、高次脳機能研究、34 巻 1 号、82(2014.03)

・中上 美帆, 宮崎 彰子, 逸見 佳代, 後藤 良美, 種村 純, 椿原 彰夫: 物品の誤認を呈した外傷性脳損傷の一例、高次脳機能研究、34 巻 1 号、80-81(2014.03)

・種村 留美, 長尾 徹, 野田 和恵, 福永 志浦, 中田 修, 種村 純: 記憶障害者に対する行動管理ア

プリの開発、高次脳機能研究、34 巻 1 号、73-74(2014.03)

・太田 信子, 種村 純: Gateway 仮説に基づく展望  
記憶過程の検討 the Cambridge Prospective Memory Test を用いて、高次脳機能研究 (1348-4818)34 巻 1 号 Page40(2014.03)